

# 学園歌の沿革と現状をみる（続編）

石田健一

先の『年史紀要』第十八号で、「学園歌の沿革と現状をみる―その正しい継承と高揚を願って―」と題し、主として学歌と学生歌の沿革について述べたが、本号ではその続編として、関西大学讃歌、新学生歌、応援歌および追遥歌について述べることにしたい。また、あわせて大学のスクールカラーにも触れ、最後に、学歌の沿革についての訂補を加えたい。

## 一 関西大学讃歌の制作

関西大学讃歌は、関西大学が創立八十周年を迎えるにあたり、周年記念事業として制作を決定したものであった。ここで周年記念曲を作るにあたり、その作詞を校友

で劇作家の大御所、北條秀司（昭二専国）に依頼したのであった。当時、北條はすでに「王将」や「司法権」等の名作を世に残す日本演劇界の重鎮として活躍を続けていたが、この要請を快諾した。

母校からの要請を、北條は殊のほか喜んだことが記録に残されている。『関西大学百年史』通史編上（二三七ページ）にその時の北條の感想が残されている。ここでは、簡潔に要約しておきたい。

創立八十周年を記念して讃歌を制定するということとで依頼を受けた。卒業以来の疎遠もあり、承諾した。当時と現在では学園も隔世の感があるが、自

然の秀麗を誇った千里のイメージを根底にして雄大、華麗な姿をうたったつもりである。開学以来の独立自尊の精神が永劫の未来に伝承され、社会の発展に貢献する無形のエネルギーになることを祈っている。

(抄)

北條は「ぜひとも母校のご恩に報いたい」と周囲に感想を漏らしている。この時、北條から渉外を引き受けていた校友・丸岡武氏（昭三三法）の述懐である。この北條の気持ちは、大学からの謝礼を固辞したというエピソードによって、北條の真情を知ることができる。

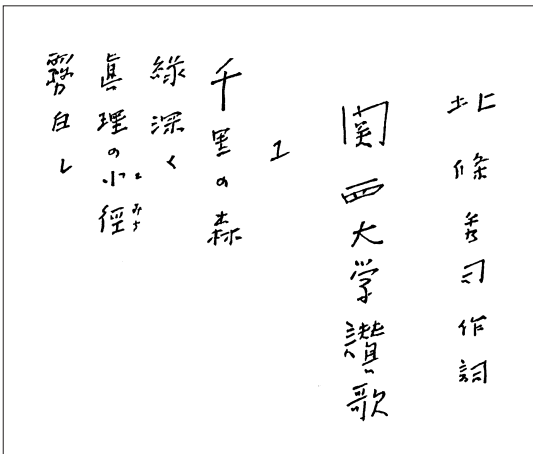
その時、北條がA4判二連の五線紙を利用して、そこに大きな力強い字で書いた歌詞がいまも保存されている。この歌詞は、まさに、今述べた千里の雄大な姿を活写する。字は整然として大きく、筆勢も強い。

この歌詞を受けて作曲家・清水脩が曲をつけた。大きなスケールをもつ歌詞に対して、オーケストラと合唱の組み合わせが相応しいと直感して、構想をまとめあげた。

清水が精力を注いで完成させたのは記念式典の三週間



関西大学讃歌の作詞者・北條秀司



関西大学讃歌の筆跡(冒頭部)

前であった。

創立八十周年記念式典をはじめとする一連の周年記念事業は、昭和四十（一九六五）年秋に挙行されている。

関西大学会館の竣工、創立者群像、児島惟謙、山岡順太郎らの胸像の除幕、ペルーアンデス学術調査等である。

このうち、記念式典は、千里山キャンパス体育館で挙行されたが、関西大学讃歌は朝比奈隆指揮の関西交響楽団と大阪放送合唱団によって演奏された。

関西大学では、この八十周年記念行事だけではなく、創立三十周年以降、十年毎の周年記念行事をすべて、いわゆる「足掛け算」でカウントしてきた。百周年は、この点を是正して満百年をカウントして昭和六十一（一九八六）年十一月に行うことにしたものである。

ところで、この関西大学讃歌は、大学が創立百周年を迎えたとき、再び記念式典歌として演奏しようという話がかもち上った。制作後二〇年の歳月を経たわけであるが、なお、新鮮にして力強く、荘重なこの曲をもって最適としたのであった。

北條の歌詞は、第一節で千里山キャンパスの豊かな緑

を、第二節では大淀に育まれた若人を、そして第三節には八十年の歴史をうたっている。歌詞を細かく検討したところ、第三節に「ふりかええる 八十（やそ）の春秋」の一句があり、これを修正することが問題となった。当時の理事会でも検討されたが、「八十の春秋」を「百の春秋」と読みかえようということになった。「ひやくの春秋」と「ももの春秋」の二通りに読めるが、「ひやく」と読むことに決めた。当時の村山弘広報課長が北條のもとに出向いて事情を説明のうえ、「ひやくの春秋」と歌うことの承諾を得て、式典曲としたのであった。

因にこの百周年記念式典は昭和六一（一九八六）年十一月四日、大阪城ホールで一万三千人の列席者を迎えて挙行された。八十周年記念式典ではプロの楽団によって演奏された「関西大学讃歌」であったが、この日は自前の学生音楽団体合同の楽団によって演奏されたのであった。

合唱付きのオーケストラによるこの曲を聴いた校友の中に、これを聴いてベートーヴェンの第九を彷彿とさせると心境を眩いた人がいたという話も聞いた。

## 二 新学生歌について

### 1 記念歌として公募

「関西大学讃歌」とともに、創立八十周年の佳節を記念して記念曲が公募された。広く学生・職員・校友から公募した「新学生歌」である。大正ないし昭和初期に作られたであろう先の学生歌に対して、新しい時代感覚を盛り込んだ新学生歌を公募したのである。この経緯を『百年史』（下巻・二三八～二四〇ページ）から拾うと、歌詞は応募五十二編の中から、当時、大阪府立高津高等学校教諭を務めていた校友・明珍昇（昭二五専国、昭二七文、昭三四院修国）の作品が選定された。

また、この当選歌詞が公開されて、その歌詞に対する曲が公募され、三十七曲の応募があり、その中から、当時、文学部英文学科三年次に在学した緒方（現姓・大塚）京子氏の作品が選定された。選定曲は、さらに作曲家・清水脩の手に委ねられて編曲され完成したのである。北條秀司・清水脩になる「関西大学讃歌」とともに、創立八十周年記念式典で朝比奈隆・指揮、関西交響楽団、大

阪放送合唱団によって演奏された。

この新学生歌の作詞者は、当時、すでに大阪市歌をはじめ、五指に余る高等学校の校歌作詞歴をもち、何冊かの詩集を出版した実績をもっていた。

### 2 新学生歌作詞の背景

明珍昇は、昭和三十四（一九五九）年、大阪市が市制七十周年記念に募集した大阪市歌で歌詞の部に応募して当選している。古代から脈々と息づく大阪の流れを、第一節「みおつくしの精神」、第二節「雑踏の力強さ」、第三節「大阪の未来」を主題として歌詞を綴っている。「流れている 流れている 大阪は さわやかに…」（第一節）、「動いている 動いている 大阪は 晴れやかに…」（第二節）、「生きている 生きている 大阪は たくましく…」（第三節）で始まる各節は、淀川とともに生きてきた大阪の未来を川の流れに託して歌いあげた曲となっている。

ところで、新学生歌の当選歌詞を書いた明珍は、粗原稿の段階で母校を訪れている。歌詞の中に描いたイメー

ジと現実の学園の姿のくい違いを修正したかったためである。これは公募締め切りが三日後に迫った昭和四十年五月二十八日の朝のことであった。そこで明珍は、皮膚にしみとおる学生時代の感情を呼び覚まして推敲を重ねたと述懐している。明珍は「五月の風が馥郁と香る季節——何かこれからすることが本当のもののように皮膚にしみ通る朝——わたしの学生歌のイメージはここに定まったのである」と学園に立ち尽くし、「新学生歌のイメージはこれで決まった」と快哉を叫んだ。この時の様子は校友会機関紙「関大」（第一二三号）に詳しい。



新学生歌作詞者・明珍 昇

### 3 原曲と完成曲

大学創立八十周年の記念事業に関する第一次資料は多く保存されているが、その中で、緒方氏が応募したこの新学生歌の自筆原譜も保存されている。当選後、作曲家の手に委ねられて編曲されたものが「新学生歌」として日の目を見たのである。その原譜に当たる緒方氏の応募作は、貴重な第一次史料である。

ところで、この原譜からはいろいろと想像されるところがあつて興味深い。

まず、緒方氏が作曲した原譜は清水脩の編曲よりも高い音程で歌う楽譜が残されていることである。これによると緒方氏は、混声合唱曲に編曲されて、華麗にきらめくソプラノで飾られた、輝くような曲をイメージしていたのではなかったか。一方、編曲では、学生生活の中で広く無理なく歌われる斉唱曲として、男声の音域の限界にも配慮しつつ編曲されたものと受けとることができる。曲の前半部は、原曲のメロディを活かしつつ二〜三音さげられたうえ、後半では原作者の音程からトーンを落として曲をまとめた形跡が伺える。これによって原曲のイ

緒方（現姓・大塚）京子氏作曲の  
「新学生歌」楽譜の一部

ホーホケツキョ

うぐいすの鳴き声からの採譜

メージとは若干異なる。緒方氏は原曲では、最後の「関大 関大 関大のわれら」と歌うあたり、ソプラノの高い音域の華やかなメロディーを夢見たのかもしれない。蛇足ながら、ここにうぐいすの鳴き声から採譜した譜面を載せた。緒方氏の書いた高い音域のメロディーはホーホケキョの最高音のレベルとほとんど変わらない。また、この新学生歌であるが、よくみると、意外？と

思われる点がある。第一節第四聯に「友よたたえよこの息吹き」という歌詞があるが、後に続く第二節、第三節ではともに七五調となつてゐるのに、第一節だけは「このいきふき」と七六調で歌うように曲をつけている点である。「息吹」を「いぶき」と読むボキャブラリーがないはずはなく、何とも愛嬌のある勘違いの跡を残したが、ここは編曲者・清水が「いぶき」と三音節に短縮して曲

を完成させている。

さらに、学歌と異なり、新学生歌では、作詞者が歌詞各節の最終行に「関大 関大 関大 関大のわれら」と「関大」を四回繰り返し返っていて、作曲者が入れた技巧上の「リフレイン」ではないと同時に、新学生歌では作曲家が歌詞の音節に忠実に曲をつけたものになっている。

#### 4 学生歌と新学生歌

学生歌は先に述べているとおり、大正十二（一九二三）年四月に制定されてから、すでに八十余年の歳月を閲したことになる。それに比して新学生歌は一九六五年の作であるから、たかだか四十年余りに過ぎない。そんな点もあるが、学生や校友に親しまれて歌われているのは「学生歌」のほうが圧倒的に多いのは残念である。緒方氏は、この新学生歌のテンポを学歌と同じく「♩ $\parallel$ 112」と指定していて、譜面には「mf 力強く活発に」とあるとおり、明るく元気に歌ってほしい曲の一つである。『日時計』『夕陽の樞』等の詩集を世に出した校友詩人が作詞し、現役の学生が原曲を作曲したこの新学生歌が、もっと広く、

学生生活のいろいろの場で歌われることに期待を寄せたものである。

### 三 応援歌について

#### 1 応援歌成立の経緯

現在、スポーツ競技の場で応援時に歌われている応援歌の成立の時期は分かっていない。しかも、応援歌の歌詞は二節からなるが、その作詞者も作曲者も不祥である。

関西大学は周知のとおり、山岡順太郎が総理事となつてから、私財を投げ出して、当時、東洋一といわれた旧第一グラウンドを造成したのを契機としてスポーツが振興し、優秀で世界的なアスリートを輩出することにつながっていったのであるが、さらに大学昇格を記念して、帽章・襟章・応援歌が大々的に懸賞募集されていたことが『千里山学報』（第二号）に残っている。この趨勢が、応援歌の成立を加速させたのである。

事実、大正十一（一九二二）年には、こうして一一二編の応募歌詞が集まったという。また、帽章の応募は一二六、襟章は一四五であったと報じている。このように、

大学昇格をエネルギー源として学生の意気高揚を図ったため、数多くの応援歌が誕生したことが分かる。『千里山学報』に記載されている運動各部共通の応援歌としての「開戦の歌」ほか、各運動部別の応援歌として、野球部・庭球部・角力部・蹴球部・陸上部の応援歌が『千里山学報』を通じて提案されていたことを知ることができる。

応援歌の普及で、もう一つ考えられるのが、大正十二(一九二二)年の春に、千里山キャンパスに応援団が結成されていることである。この応援団の誕生が、各部別の応援歌誕生の大きな契機となったことは明白であろう。

ところで、現行の応援歌の歌詞は、ここでも初めの三聯は七五調の構成となっている。スポーツ各種の競技場で歌われるが、どの場面でも、これが調子はずれにゆくりと歌われたことは聞かない。必死の応援が悠長なテンポを拒むのは当然であろう。

## 2 局面に合わせた応援歌

この応援歌に関連して、三種類の応援歌が提案されていたことを書いた。

歌詞をみると、稚気があつて何とも他愛ないが、勝つたときは勝利を喜び、負ければリベンジを誓う軒昂たるものである。これは、余り知られていないので、『千里山学報』(第三号・大正十五年九月十五日)から「開戦の歌」とともにここにあげておきたい。

### ◇開戦の歌

若き命のみなぎれる／瞳とひとみ交わしつ、／友よ  
しばしは手を握らん、／學びの道にいそしめる／契  
りは深きわれらなり。

若き力のみなぎれる／腕とかひな分かちつつ／友よ、  
しばしは別れなん、／た、かいの地に臨むとも／え  
にしは深きわれらなり。

今日の一日を戦いて／明日はふたたび友たらん、／  
こゝに願わく、もろともに／正義のいくさ華やかに  
／戦い終えて別れなん。

### ◇勝利の歌

勝つた、勝つた、勝つた。／關西大學また勝つた。



／われらの選手は精鋭無雙、／われらの選手は剛勇無敵、／戦常に勝となる／われらが譽れは世界に響く。

勝ちて驕らぬ意氣はあれ、／しばしは許せわが勝鬨を、／青春のわれらの誇りとせんに。／勝つた、勝つた、勝つた、勝つた、／關西大學また勝つた！

#### ◇敗戦の歌

惜しや長蛇を逸すとも／何か怖れん空寂寂、／見よ復讐の一戦に／木っ葉微塵に踏みまくる／勇健無雙の武者振を。

けが負け、けが負け、ホイ、ホイ、ホイ、／男子の雅量見たかホイ、／ホイ、ホイ、ホイ。

(いずれも原文のまま)

ただ、勝敗によって応援歌を歌い分ける形跡は、今の逍遙歌の序誦といわれる、前口上の中に、わずかに影を残しているようにみえる。この序誦は合唱に先立ってリーダーが口吟するもので、その中に「千里山上に花と咲

く：」という一句があるが、これが競技に負けた時は「千里山上に花と散る：」と置きかえて吟じられていることである。

また、この「開戦の歌」「勝利の歌」および「敗戦の歌」が、応募作の中から選定された以後、実際に歌われたのかどうかは分からない。したがって曲を知る資料は見当たらない。想像に過ぎないが、「ホイ　ホイ　ホイ」と合いの手が入るあたり、結構陽気なお囃子入りの曲であったものと想像される。もし、そうであれば、現行の逍遙歌のような、一種の哀調を帯びたメロデイとは程遠い、悔しさ、鬱憤晴らしの雰囲気があったのかも知れないが、メロデイの譜面はもちろんのこと、伝承ですら残されていないのは残念なことである。たとえ負けて口惜しくても落ちこまず、明日に向かって捲土重来を期すという、当時の陽気で横溢な学生気質の一端を垣間見るだけで、残念なことである。

#### 四 逍遙歌について

関西大学逍遙歌は、歌詞が三節からなり、第三節一行

目、三行目の七音であるべきところが八音になっているところを除き、各節とも七五調に推敲され、七五・五聯で一節を構成する歌詞となっている。

さらに、この学生歌には、多くの学園歌の中で、唯一、「序誦」と題する口上がついている。この序誦は、指揮をとるリーダーによって口吟されるものであるが、節回しに個性がみられる。ここでは、一応、序誦を掲載しておきたい。

## 序 誦

静かに去り行く春（夏・秋・冬）の日に、契りし  
夢も永遠に、ここ千里山上（地名）に花と咲く。／  
帰らぬ情に駒止どめ、しばしの憩い、供にせん。／  
さればいざ歌わんかな、舞わんかな、我等が関西大  
学逍遙の歌／一番、二番、三番…。

といったところで、高吟する応援団長の独壇場でもある。学生・校友の間で年代を超えて親しまれ、歌い継がれてきた「青春の曲」である。

哀歓が漂う大正ロマンの響きを持つこの歌は、作詞者も作曲者も定かではない。しかし、歌詞には「自治」が二度、「自由」が一度出てくるとともに、「千里が丘」が二度出てくることから推測して、成立は大学が千里山キャンパスに移転して大学予科の授業を開始した大正十（一九二一）年四月以前に溯るのは無理かと思われる。さらに、教育理念として提唱していた特定の用語が散見される点からみて、山岡順太郎が総理事に就任した大正十一（一九二二）年以降とみるのが至当ではなからうか。翌大正十二（一九二三）年一月には関西甲種商業学校校歌が選定され、その翌年が学生歌の選定と続く頃のことであり、学生の発意によるものかもしれない。また、この三節の歌詞から、順に季を求めると、第一節は春、第二節は、花は散り、月は落ち、雁が飛んでいる情景からは秋であろうし、第三節は再び春から夏であろう。一方、メロディから見ると、あきらかに大正から昭和初期の雰囲気漂うメロディで、学生・教職員・校友を問わず、ごく自然に肩を組んでゆつくりと歌われる、長い生命を持ち続けて今日にいたった曲である。

## 五 「学園歌の沿革」訂補

### 1 一カ所に「音階の誤り」あり

本『年史紀要』前号で「学園歌の沿革と現状をみる」と題した小文を掲載していただいたが、その後の点検で現行の学歌にもう一カ所、誤りがあることを発見した。

それは、学歌主旋律譜の第二十三小節の第三音符の音程が一音違っていることである。歌詞でいうと「若き心にたたえなん」とあるところの「え」の四分音符の音階が、直前の長音「ー」と同じ音階に、誤って一音上がってしまっているのである。

山田耕筰の原曲では、「え」が直前の「ー」の音程より一音下げていることによって、歌に微妙な抑揚を与えているが、同音続きの棒読みならぬ棒歌いともいえるのか、単調になっているのである。現在歌われている実態は、この二音節同音程になっていて、大学関係の出版物をはじめ、広く流布されている出版物に掲載されている学歌の楽譜はこの誤りを冒している。

ところで、この誤記の発生源を調べてみたが、大正十

一（一九二二）年十月十五日付『千里山学報』第四号附録として発行された楽譜には誤りがないことが判明している。その後、昭和二十七（一九五二）年に『関西大学学報』付録として作成され、全学生に配布された「関西大学学歌」（B5・四ページ）が誤っていたことが発端であるように思われる。それ以来、名曲といわれた学歌は、主旋律第二十三小節第三音符が第二音符と同じ音程で歌われていたことになる。

(正)

(誤)

関西大学学歌の正・誤部分  
(主旋律第23小節)

振り返れば、作曲者の山田耕柞は、この学歌の作曲後、日本歌曲の不朽の名曲といわれる「からたちの花」を三年後に、そして「赤とんぼ」「この道」を五年後に世に送り出していることを考え合わせると、学歌の持つ曲の繊細な抑揚を見落として、間違った楽譜で歌う学歌を聞けば、その無神経さに果たしてどんな言葉を発したことであろうか。

これは山田耕柞のオリジナルと照合して改めて分かったもので、ぜひとも、正しい譜面に直してほしいと思う。

ところが、千里山キャンパス凜風館で、毎日、午後五時五十分に自動演奏されるカリヨンの奏でる学歌は、正しいテンポで奏でているが音程はどうであったか。アイデンティティを証する誇るべき無形文化財を正しく継承していくことの難しさを痛感する事例となった。

あらゆる印刷物、出版物等に掲載されている学歌の楽譜をできるだけ早く修正することが望ましい。原曲を歴史の事実として継承していくことが重要だからである。

## 2 再び「スローテンポ」の課題に戻る

そもそも、この『年史紀要』(前号)に「学園歌の沿革と現状をみる」と題した小文を書くに至った直接の動機は、昨今、学歌を歌うテンポが随分遅くなっていて、正しく学歌の雰囲気伝わらないという問題提起があったためである。

そこで、前号で学園歌の沿革に触れた訳であるが、もう一度、その点を振りかえってみる。風潮や流行等、つまり時代の流れの影響が指摘されるが、さらに一点、遠因があるように思われる。

学歌の誕生時、他の学園歌が十分に整備されていないか。そのため、学歌作曲者・山田耕柞は、これを応援歌としても歌えるように指導した形跡が残っている。このことは、前号(四四ページ下段)にも記したが、各節の最後の繰り返し三度、「関西大学」が続くところで、それぞれの間に「フレー フレー」または「エイ オー」等の掛け声を挿入することによって、応援歌としても使えると指導していることである。

その後、学園歌には応援歌、学生歌、逍遙歌等が加え

られて、多彩な学生生活の各場面を演出することができ  
るようになった。そして、この学園歌の整備によって、  
学歌はまさに学歌そのものに立ち返ったために、「力強  
く、マーチのように」という曲調を徐々に失い、本来求  
められていた「厳粛、壮大、雅麗」な雰囲気をも失って  
いったのではなからうか。

山田耕柞は歌唱指導のレッスンで、「シンコペーション  
(＝切分音)は明瞭に、だれてはいけない。妙味を發揮せ  
よ」と指導していることを振りかえらなくてはならない。

## 六 大学のスクールカラーについて

### 1 大学のスクールカラー制定

多くの大学ではスクールカラーを定めている。

現在、関西大学のスクールカラーは、いうまでもなく  
「紫紺」とされているが、これがいつ定着したかは不明で  
ある。歴史史料で乏しいのが色彩史料と音源史料だとい  
うことを前号でも述べたが、スクールカラーもこれに該  
当する。

そこで、関西大学のスクールカラーの沿革をたどると、

理事会の記録に至る。

大正十三年(一九二四)年一月の理事会において制定  
されたことが、はっきりと記録に残されている。その記  
録によると、

「本学のスクールカラーブルーニュートナス  
以上決議ス」

と、議事録に残されているのである。

この年は、ちょうど山田耕柞が大学の要請を受けてレ  
コードに収録するために学歌を歌ったと記録に残されて  
いる年である。ただし、余談ながら「ブルー」ではい  
ささか意味が異なるが、本来は「ブルー」であろう。日  
本語では「青」に相当するはずである。

ところで、この決議は、突如として、理事会が一方的  
に決定したものとは考え難い。何も素地がないところに  
いきなり「スクールカラーはブルーだ」ということで  
は、余りにも唐突に過ぎると思われる。この常識を前提  
にして考えると、ばらつきを見せながらも、自然に、青  
色から紺色系統へのまとまりを見せていたものと考えら  
れるが、このあたりの事情も定かではない。要するに関

西大学のスクールカラーはブリューであるとしている。これに対して記録では、昭和六（一九三一）年に応援団が「紺色」の応援団旗を新調したという記録が残っていることである。

## 2 では「紫紺」はいつからか

現在、関西大学のスクールカラーとされている「紫紺」は、紺と紫の混合色である。

議事録で、「ブリュー」とあるものが、果たして何時から「紫紺」に変色したのであろうか。これには不明な点が多く、とくに色彩は光源の演色性によっても変化するため「色」の特定は難しい。

ここで、スクールカラーが学園歌の中でどう歌われているかを調べてみると、まず、よく知られているのは応援歌の第一節三行目に「紫紺の征旗輝けり」とあることである。学園歌の歌詞で色を規定しているのは、実はここだけである。第一高等学校第一中学校校歌には第二節一行目に「歴史と校旗の 光を浴びて」とあるが、ここでは、具体的に校旗の色までは示していない。

スクールカラーの制定、応援団旗の新調とみてくると、やはり背景には関大スポーツの興隆とは無関係ではないように思われるが、いかがであらうか。そして、スクールカラーは当初、紺色であったとみるのが至当ではなからうか。

では、なぜ「紫紺」と化したかについては、いくつかの推測が成り立つ。まず、「紫紺」は「紺」の褪光色の一種とみることができることである。

①「紺」は「青」そのものではなく、元来「紫」を含んだ色である。

②強い逆光下で紺色の校旗を透過光で見ると紫紺に見えるため、その色をスクールカラーと思いついて入れた。

③弊衣破帽の風潮の中で、褪色感のある紫紺が当時の学生の嗜好に合っていた。

④応援歌の「紫紺の征旗」の「紫」は装飾語、接頭語として音節合わせに付したとも考えられる。

変遷の流れは明確に分らないまでも、およそ考えられる点であり、現在、関西大学のスクールカラーは「紫

紺」とされているのである。ただし、創立百周年を期して、スクールカラーの統一確認がおこなわれ、色の配合もはっきりと規定されている。

### 3 「紫紺」色の統一に向けて

スクールカラーの紫紺は混合色であるため、紫と紺を混合する割合によって色合いが変化する。紫紺だとしても、実際にはばらつきをみせていたのが、創立百周年を迎えようとしていた頃の実態であった。昭和初期から半世紀の間に生じたばらつき幅であったといえる。音楽の場合はまだ幸いなことに楽譜という万国共通の尺度があるが、色の場合は、色見本に合わせるの難しい。

創立百周年を迎えるにあたって統一を図ろうとしたのはこのためである。

そこでスクールカラーの「標準色」を策定するために検討を重ね、理事会においても確認したのが「F G 58 原色藍 51 パーセント F G 紅 49 パーセントの混合色」であった。これによって創立百周年記念事業の数々の行事や事業におけるスクールカラーは統一されて、ばらつきを残

さず遂行することができたのであった。しかし、厳格にいうと、これでも印刷インキの製造会社によって、微妙なばらつきを除去できないというから、色の話は厄介である。厳格にいうと、色も波長をもって正確に規定しなくてはならないのかも知れない。因に上製本仕上げとした『関西大学百年史』（各編）の装丁布クロスは特注のスクールカラーで染色したものを使用している。

創立百周年からすでに二十有余年が経過し、実務的な観点から扱い易いスクールカラーのスケールを設定するため、平成七（一九九四）年七月に、再度、「D I C 二五（F G 14 紅 45 パーセント F G 58 原色藍 40 パーセント C G マゼンタ 15 パーセントの混合色）」を推奨カラーとして再確認している。大学の広報委員会において、マスメディアとしてのスクールカラーの標準化を図ったものである。そして、さらに印刷の実務面では、シアン 100 パーセント マゼンタ 100 パーセントを紫紺として使用する（シアンとマゼンタの二版刷り）ことを実用基準として推奨し、統一を維持しようとしているのである。

○

これで、前号に続く「学園歌の沿革と現状をみる」を終わる。しかし、大学・学生・校友、さらには学生の家族も包含した、大学のアイデンティティの象徴は学園歌とスクールカラーにとどまらない。ここでは、さらに校章等についても触れたかったが、いささか準備不十分のために言及を避けた。他日、校章等のクロニクル・データが整備されることを期待したいと思う。

(いしだ けんいち 年史編纂委員会委員・)

関西大学教育後援会)

## 訂正

前号掲載の本稿正編五五ページ下段にある「阪東政一(昭二六・経)」は「昭二二・大経」でした。ここに訂正します。